

妊婦の自我状態の特性および就業との関連

| | |
|-----|---|
| 著者 | 坂井 明美, 炭谷 みどり, 島田 啓子, 田淵 紀子, 亀田 幸枝, 林 千寿子 |
| 雑誌名 | 日本助産学会誌 = Journal of Japan Academy of Midwifery |
| 巻 | 13 |
| 号 | 3 |
| ページ | 68-69 |
| 発行年 | 2000-01-01 |
| URL | http://hdl.handle.net/2297/34883 |

doi: 10.3418/jjam.13.3_66

5. 妊婦の自我状態の特性および就業との関連

金沢大学医学部保健学科 ○坂井 明美, 炭谷みどり
島田 啓子, 田淵 紀子
亀田 幸枝, 林 千寿子

I 緒言

女子労働者の就業形態は、近年では出産、育児期に一時的に就業を中断し、子供のある程度の成長まで家庭生活に力点をおき、再就職するというライフパターンを持つ女性が増加してきている。

日本労働研究機構の「女性と仕事に関するアンケート」による「結婚、出産、育児を機に仕事をやめた理由」によると、雇用形態にかかわらず「家事、育児と仕事を両立させるには時間的、体力的に困難」とあげる者が過半数以上を占めていて、働く意欲はあっても両立の困難さのためにやむなく退職、離職している現状を窺い知ることができる¹⁾。また一方において妊娠、出産、育児と仕事継続の関連については就業が妊娠・出産に影響するという報告²⁾や、仕事継続を、男性工場従業員に対してのストレスや精神健康状態の関連から見た報告³⁾はあるが、出産と、離職・退職との関連を個人の心理的因子から研究されたことはほとんどない。そこで出産を機会とした離職・退職の意思を持つ妊婦の心理的的特性を明らかにするため、東大式エゴグラム（以下、TEG⁴⁾）を用い、就業あるいは離職・退職の意思をパターン分類し、さらに離職・退職と自我状態の関連を検討した。

II 方法

調査対象は1996年8月第2-3週の2週間に某市内のS産婦人科病院に受診した女性で、本研究に同意を得た妊娠22週から39週までの女性113人のうち、TEGの妥当尺度の偏位尺度（Deviation scale. D尺度）12点以下は社会的偏位があるとされ、疑問尺度（Question scale. Q尺度）は36点以上では信頼性が乏しいとされているので、これに該当した13人を除外し100人を本研究の対象者とした。対象者の就業形態（出産前後に退職、育児休業、出産後も継続）と、家族形態、TEGによる自我状態との関連を分析した。

調査方法は背景調査票は面接により行い、TEGは質問紙を手渡し自己記入式で依頼した。

なお、統計処理は、割合の比較では、 χ^2 検定を用い、3群の平均値の差の検定では一元配置分散分析を用いた。いずれも両側検定とし、有意水準5%未満を有意とみなした。

III 結果

1. 家族形態、初産・経産別の出産前後における仕事継続の意思

有職者39人の仕事の意思を家族形態で比較すると出産前後に退職する意思を有する者は、核家族の割合が有意に高かった（ $p < 0.05$ ）。

2. 100人のTEGパターン分類

パターン分類を全体でみると、17型に分布し混合型が59人、優位型31人、低位型10人であった。就業の有無で比較すると、有職者39人のうち混合型が22人（56.4%）、優位型15人（38.4%）、低位型2人（5.1%）であった。上位は混合型の平坦型（モーレッツタイプ）6人、NP優位型5人、A優位型4人、混合型の逆N型4人であった。無職者の57人では混合型33人（57.9%）、優位型16人（28.1%）、低位型8人（14.0%）であった。上位は混合型のU型に11人、平坦型（モーレッツタイプ）9人、FC優位型6人であった。なお、有職者と無職者のパターン分類の割合を比較したが、有意な差は認められなかった。

3. 仕事の有無別のエゴグラム得点

5つの自我状態の得点を仕事の有無の比較では、どのエゴグラム得点においても仕事の有無で有意な差は認められなかった。

4. 出産を機会とした仕事継続の意思別エゴグラム得点

表1には、有職者の出産前後における仕事継続の意思別のエゴグラム得点を比較し示した。CP、NP、A、FCの各自我状態の得点と、仕事継続の意思との有意な関連は認められなかったが、ACの自我状態は、出産前後に退職するもの、育児休業をとる、出産後も継続するものの3群間に有意な差が認められ（ $P < 0.05$ ）、出産前後に退職する者

のACが高いという結果を示した。

表1 出産を機会とした仕事継続の意思別のエゴグラム得点

| 仕事継続の意思 | 人数 | エゴグラム得点 (平均値±標準偏差) | | | | |
|-----------|----|--------------------|-----------|-----------|-----------|-----------|
| | | CP | NP | A | FC | AC* |
| 出産前後に退職する | 8 | 8.75±4.68 | 14.8±2.82 | 12.4±3.34 | 14.0±2.62 | 13.1±2.85 |
| 育児休業をとる | 14 | 7.57±3.40 | 13.6±3.69 | 10.9±5.02 | 12.1±4.43 | 9.29±4.23 |
| 出産後も継続する | 17 | 8.41±4.08 | 15.2±3.68 | 11.5±3.50 | 13.9±3.20 | 9.71±3.93 |

一元配置分散分析による有意差: * $p < 0.05$

核家族における出産を機会とした仕事継続の意思別をエゴグラム得点で比較ではCP, NP, A, FCの各自我状態の得点は核家族の場合の仕事継続の意思に関連はなかったが, ACの自我状態は出産前後に退職するとする場合, 他の2群より有意に高い結果であった ($P < 0.05$)。

IV 考 察

まず5つの自我状態のエネルギーの配分をプロフィール化し, 全体的, 総合的に捉え, 個人を包括的に理解するためのパターン分布を成人女性と比較して, 妊婦の心理的特性の傾向を明らかにした。対象に多いパターンの上位は混合型の平坦型(モーレッツタイプ), U型, NP優位型, FC優位型の4型で約半数を占めている。これをTEG第2版の開発者らの調査⁴⁾における成人女性と比較すると, 平坦型(モーレッツタイプ)は1.4%を占めたに過ぎなかったことに対し, 本対象では15%にも達し, またU型は2.0%に対し, 本対象では13%と大きい割合を呈した。モーレッツタイプは, 各自我状態が非常に高値を示していることから, 精神エネルギーが大変高い人のエゴグラムで, 仕事も遊び心も十分にあり, ただし, この状態が長く続くとストレスになる場合もあるとされる⁴⁾。一方, U型はNP, A, FCの健康的で明るく自己主張する自我状態の低さから葛藤状態に陥り易いといわれる⁴⁾。本対象を, 年齢構成などの特性が多少異なる集団と比較したため, その解釈は慎重でなければならないが, モーレッツタイプ, U型のどちらにおいても大きな差が認められたため, この2型が妊婦の特徴的な心理であることが窺い知れる。

育児をサポートする家族として核家族と, 複合家族から検討してみると, 核家族ではじめての出産の場合に全員退職すると答えている事から, 日本での育児優先型とする意識と行動は, 伝統的な事象と考えられ¹⁾, この因子が最も離職・退職に影響すると考えられる。仕事継続の因子として職種や労働待遇についての関与についても, 今後の調査で明らかにされなければならない。

自我状態の中で離職・退職の意思に関係があった自我は, ACであった。ACはTEG第2版の開発者らの調査⁴⁾における成人女性での平均値±標準偏差は 9.87 ± 4.38 点であったのに対して本対象における妊婦の場合の有職者 10.3 ± 4.34 点, 無職者 10.3 ± 4.04 点と就業の有無においては差を認めなかった。しかし仕事継続の意思では, 出産前後に退職する人のACは有意に高い結果を示し, このことは核家族の場合にも当てはまった。したがって, 妊婦, ことに核家族における妊婦の仕事継続のためには, ACを中心とした人格特性を理解した心理的サポートのあり方の必要性が示唆される。心理的サポートによってAC得点の減少が, 仕事継続に結びつくという研究結果が得られれば, さらに本推論が支持されよう。

V 結 論

出産と, 離職・退職との関連を個人の心理的因子から研究されたことはほとんどない。そこで出産を機会とした離職・退職の意思を持つ妊婦の心理的特性を明らかにするため, TEGを用い, 就業あるいは離職・退職の意思をパターン分類し, さらに離職・退職と自我状態の関連を検討した。その結果,

1. 仕事継続の意思と家族形態の関連では出産前後に退職する意思を有する者は, 核家族の割合が有意に高かった。
2. 有職者と無職者での5つの自我状態の得点に差は認められなかった。
3. 有職者の出産前後の仕事継続の意思をエゴグラム得点で比較した結果, ACの自我状態のみが出産前後に退職するとした者に有意に高い結果であり, 核家族の場合でも同じことが認められた。

以上の結果から, 妊婦は, ストレス状態や葛藤状態にあることが窺い知れ, また核家族における妊婦の仕事継続のためには, ACを中心とした人格特性を理解した心理的サポートの必要性が示唆された。

引用文献

- 1) 労働省女性局編:平成10年度女性労働白書-働く女性の実情-, 財団法人21世紀仕事財団, 東京, 1999.
- 2) 佐道正彦:はたらく女性の妊婦と出産, 138-150, 形成社, 東京, 1995.
- 3) Ezoe, S., Morimoto, K.:Quantitative assessment of stressors and stress reaction:a review. Jpn..J. Ind. Health, 36, 397-405, 1994.
- 4) 東京大学医学部心療内科編:新版エゴグラムパターンTEG(東大式エゴグラム)第2版による性格分析, 22-53, 金子書房, 東京, 1995.